

修了生からの
お便り



子どもと共に 生きる・つくる

「ここ、20本以上も打つてあるよ」「意味ないね」「打ちやすい場所だから楽しくていっぱい打っちゃったんだね」。2年半前の「あの日・あのこと」が子どもたちの生きる「いまここ」に駆けつけてきた瞬間です。ヤギ（ゆめちゃん）との暮らしをつくってきた子どもたちは、3月、ゆめちゃん小屋を解体しました。お別れの日に向けての準備です。板に十分すぎるほど打ち込んだある釘を一本一本抜きながら、子どもたちはゆめちゃんのためにと懸命に打ち込んだ時の出来事とその経緯「いきさつ」を語りだしたのです。それは、自己の育ちを自覚し、今を確かに「生きる」子どもたちの姿と言えるでしょう。

子どもは、この瞬間瞬間を精一杯生きています。これらの積み重ねが子どもの生きる今をかたちづくり豊かにします。子どもを目の前に私たち教師が為すべきこと。それは、「子どもを感じ、聴き、この子にとっての今を充実した〈瞬間〉となるよう保障することではないでしょうか。そうすることで、教師もまた子どもと共にかげがえのない今ここを「生きる」ことができると思うのです。

上越教育大学大学院で学ばせていただいてから早14年が経ちます。しかし、

今も尚色あせることなく私の身体を貫いている（であろう）〈思い〉の根源は当大学院での学びにあります。子どもと共に歩む営みのなかで、大学院時代の「あの日・あのこと」がどれほど私の身体に駆けつけてきたことでしょう。その都度、西野範夫先生・松本健義先生の語りや同ゼミ仲間の言葉の意味を問い直し、ほんの少しに違いありませんが自己を更新できた気がします。貴重な2年間でした。今後も続くであろう教師人生。謙虚に、真摯に、子どもと共に「生き」「学び歩む」ことで、この2年間への感謝の意を届けていきたいと思っています。



池上 浩人
(いけがみ ひろと)

長野県出身。平成14年度学校教育研究科修了後、長野県内の小学校（信州大学教育学部附属長野小・伊那市立伊那小）の教諭を経て現在（木曽町立日義小学校教頭）に至る。